

「労災事故」を経験して

株式会社トラスト熊本

大淵 一利

「労災事故」、それは私には関係ない物、遙か遠くで起きている事故という風を感じていた。警備業に携わり11年が経とうとしているが、時々ヒヤリハットは起きていたものの「労災事故」には至らなかったのが油断をしていたと思う。その油断が今回の「労災事故」を引き起こす事になるとは夢にも思わなかった。

私は7ヶ月ほど前、自社で受注している大型イベント警備で現場隊長として従事していた。2月から3月の2か月間あり、会場に来られたお客様の車両の誘導がメインであった。イベント警備が始まって2週間ほど経った頃に「労災事故」は起きた。

その日の朝は晴天であったものの、早朝の朝露で地面に敷かれた芝生は湿っていた。いつも通りのミーティングを終え、事務局への連絡、報告も終わり、立哨している隊員の様子を見に行った時の事である。隊員が立哨している場所は土手の下、1メートル程の場所にあったのだが、そこへ行くために普段は10メートル程遠回りをする。しかしその日は回り道をせずに急な土手の斜面を降り始めてしまった。1歩目の左足を踏み出した瞬間朝露で湿った芝生で左足が滑り、その時に右足が変な方向で着地してしまい右足首に激痛が走った。

私は滑り落ちた事が恥ずかしくなり、すぐに立ち上がろうとしたが右足に力が入らず、しりもちを着いてしまった。近くにいた隊員が「大丈夫ですか？」と声を掛けながら肩を貸してくれて何とか立ち上がる事が出来た。私は「大丈夫だよ」と答え、出来るだけ平静を装いながら、警備員の休憩所まで何とか歩いて戻った。その後、当日のイベントの予定表を見ながら、少しすれば腫れや痛みも治まるだろう、と安易に思っていたのだが、治まるどころか余計に酷くなっていった。私は、朝露で芝生が湿っていたのを知っていたが、何故回り道をせずに急な斜面を降りたのだろうか？隊員に指示を出す時に、下に降りずにその場から声を掛ければ良かったのではないかとイベントの予定表を見ながら後悔していた。

何とか痛みを耐えその日の勤務をやり終え、翌日休みをもらい病院に行く事にした。病院で診察やレントゲンを撮ってもらった結果、右足首の剥離骨折、全治1か月と診断された。

これにより、現場隊長を別班の班長に移行し、また、現場の隊員の指揮統括が代わったことによる負担が増え、同僚や部下達に大変な迷惑をかけてしまった。また、病院への送迎や包帯の取り換えなど私生活の部分では家族に迷惑をかける事となった。

警備業における「労災事故」の割合として多数を占めるのが転倒、次いで交通事故、動作の反動・無理な動作・・・と続く。さらに、年代別で調べると60歳以上がダントツで多く、次いで50歳～59歳、40歳～49歳・・・と、年齢が高くなるにつれて事故を

起こし易い傾向にある。また、「労災事故」の原因と言われているのが、不安全な行動及び不安全な状態に起因する「労災事故」が94.7パーセント、不安全な行動のみは1.7パーセント、不安全な状態のみは2.9パーセントである。つまり、不安全な行動と不安全な状態が重ならなければ「労災事故」は起きにくいと考えられる。

今回の状況に置き換えると、不安全な行動が回り道をせずに急な斜面を降りた事、足元の安全確認を怠った事になり、不安全な状態というのが朝露で芝生が湿っていた事になる。この2つが重なったことが今回の「労災事故」が発生した原因である。

不安全な状態を無くす事は難しいと考えられるが、不安全な行動は本人の意識の持ち方で無くすことは出来るだろう。これまで私は現場が始まる前にKYミーティングをし、声掛けをしていたが、何処か他人事のように思っていたような気がする。特に私は現場隊長をしていたので、私自身よりも他の隊員に指導することばかりに気を取られて自分の事は後回しになっていた。結果、私自身が「労災事故」を発生させる原因になってしまった。

私はこの「労災事故」をきっかけに考え方が変わった。私自身は2度と「労災事故」を起こさないように、不安全な行動はしない・安全確認を怠らない、と仕事に行く前に声に出して自分自身に言い聞かせるようにしている。また、新任教育を行う中で「労災事故」を起こさせないように、私自身の体験談を交えながら指導・教育に熱を入れてやっている。私はこれからも第二第三の「労災事故」が発生しないようにしっかり取り組んでいきたい。